あげ、そげ、ばけ。

小泉八雲とセツが出会ったまち 松江

『いっぱい知りたい 小泉八雲とセツのお話』

いっぱい知りたい 小泉八雲とセツのお話

松江市文化スポーツ部文化振興課

松江市文化スポーツ部文化振興課

いっぱい知りたい 小泉八雲とセツのお話

２０２５（令和７）年９月１日発行

発行　松江市文化スポーツ部文化振興課
　　ＴＥＬ ０８５２-５５-５５１７

編集　羽田昭彦（小泉八雲・セツの普及コーディネーター）

デザイン・イラスト　藤川康弘

協力　小泉八雲記念館
　　小泉八雲・セツのドラマをイカしてバケる松江推進協議会

印刷　有限会社 黒潮社

本冊子の無断複製、転載等を禁じます

非売品

小泉 セツ 1868-1932年

目次（もくじ）

8P　ハーンが日本と出合うまで
14P　ヘルンさん、松江にやって来る
20P　小泉セツの23年
26P　ヘルンとセツはこんな人
32P　「小泉八雲」の誕生（たんじょう）
38P　小泉八雲の怪談
50P　松江で始まり、東京で終わる
53P　八雲とセツを支（ささ）えた人々
54P　松江に残る八雲の「面影（おもかげ）」
56P　八雲とセツの略年譜（りゃくねんぷ）
58P　参考文献（さんこうぶんけん）

※掲載している写真・資料は、着色するなど許可を得てデジタル処理を行っています。

塩見縄手の旧居　松江歴史館所蔵

『知ってるようで、はっきり知らない3つのこと』

小泉八雲といえば……
怪談「耳なし芳一」「雪女」を
書いた明治の偉人
小泉セツといえば……
小泉八雲の妻で、
NHK朝の連続ドラマ小説
「ばけばけ」のヒロインのモデル

では……、
一.なぜ小泉八雲は偉人といわれるのでしょう?
一.なぜ小泉セツはNHK朝ドラの主人公に選ばれたのでしょう?
一.なぜ松江には小泉八雲記念館と旧居、2つ施設があるのでしょう?
これから、その3つの不思議に迫ってみましょう。
答えは、この冊子のどこかに書かれています。

小泉八雲記念館所蔵

『小泉八雲は3つの名前を持っていた』

殿町の森田写真館で撮影された40才のときの写真

小泉八雲記念館所蔵

ラフカディオ・ハーン

ヘルンさん／ヘルン先生

小泉八雲

右の写真の人物は、皆さんご存(ぞん)じの小泉八雲です。

しかし生まれたときはラフカディオ・ハーンという名前でした。

ハーンがヘルンになり、最後は八雲となります。

この人物は、なぜ3つの名前を持つことになったのでしょう。

時計の針(はり)は１７５年以上前にさかのぼります。

アメリカから日本に持ってきた
トランクとボストンバッグ

小泉八雲記念館所蔵

『ハーンが日本と出合うまで』

ハーンはどこの国の人？

ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)は
1850年6月27日、
ギリシャのレフカダ島に生まれました。
名前のラフカディオは、
島の名前にちなんで付けられました。

レフカダ島の風景　小泉家提供

父のチャールズ・ブッシュ・ハーンはアイルランド出身の医師(いし)でした。
当時のアイルランドはイギリスの支配下(しはいか)にあったので、
イギリスの軍隊に所属(しょぞく)して、
ギリシャで仕事をすることになりました。
そこで出会って結婚(けっこん)したのが、
ギリシャ人のローザ・カシマチでした。
ラフカディオ・ハーンは、
夫婦(ふうふ)の2番目の男の子として生まれました。
ですから、ハーンはアイルランド人ですが、
生まれたときは父と同じイギリスの国籍(こくせき)でした。

ハーンの父、
チャールズ・ブッシュ・ハーン
1819-66年
小泉八雲記念館所蔵

両親との別れ、失明、学校中退

2才で母ローザとふたり、父の実家がある
アイルランドのダブリンに引っ越します。
けれどハーンが4才のとき、
母ローザはダブリンの家にハーンを残して、
ひとりギリシャに帰ってしまいます。
7才のときにはついに両親が離婚。
父チャールズはすぐに別の女性と再婚して
インドに行ったため、
ハーンは両親に2度と会うことはありませんでした。

神学校時代のハーン
小泉八雲記念館所蔵

ハーンは子どものいない親戚のおばあさん（大叔母）サラ・ブレナンのもとに引き取られます。
お金持ちのサラ・ブレナンのもとで育ったハーンは、
13才になるとイギリスの神学校に進み、寮生活を始めました。
しかし16才のとき、遊んでいる最中事故に遭い、左目が見えなくなってしまうのです（失明）。
（ハーンの写真を見ると、ハーンはいつも左側の顔をカメラから隠しています。
これは、左目の失明にコンプレックスを感じているからです）。
悲しい出来事は続きます。
17才のとき、サラ・ブレナンが事業に失敗して財産をなくしてしまうのです。
頼る人のいなくなったハーンは神学校を途中でやめ、
ひとりぼっちになりました。
そして19才のとき、生きるために
移民船でアメリカに行くことを決意します。

子どものころのハーンとサラ・ブレナン（1793-1871年）
小泉八雲記念館所蔵

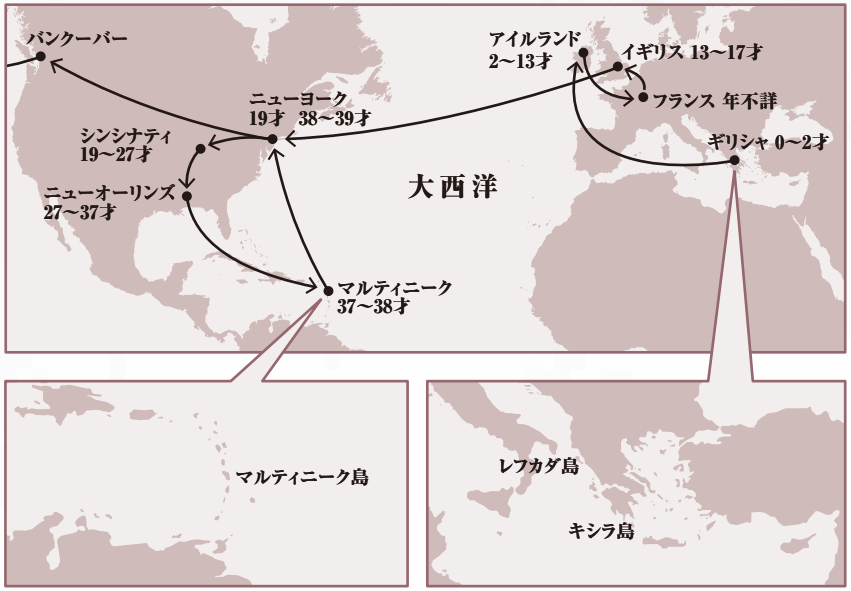
新聞記者として名を上げる

ヨーロッパから大西洋を渡ったハーンは、
19才から39才までの20年間を、ほぼアメリカで過ごしました。
最初に落ち着いたシンシナティでは、いろいろな職業を転々としますが、
24才で新聞社で記者として働き始めると、
ようやくまともな生活が送れるようになります。
その後ニューオーリンズに移り、28才のときには
友人と安食堂を始めますが、なんとその友人が店のお金を持ち逃げ！
わずか20日間で食堂を閉めるという苦い経験もしました。
しかし31才のとき、アメリカ南部で1番大きな新聞「タイムズ＝デモクラット」紙の文芸部長に
迎えられてからのハーンは、本職のジャーナリスト（新聞記者）として活躍しただけでなく、
ひとりの作家としても少しずつ本を書き始めます。

エリザベス・ビスランド 1861-1929年 小泉家 所蔵
NHK朝ドラ「ばけばけ」登場人物のモデルにもなった「タイムズ＝デモクラット」紙時代の同僚記者

小泉八雲、生涯の足跡

ギリシャからアメリカ（0～39才）



アメリカから日本（39～54才）

『ヘルンさん、松江にやって来る』

ハーンと日本をつないだものとは？

19才でヨーロッパ発アメリカ行きの移民船に乗ったハーンは、
39才のとき、今度はアメリカから太平洋を渡り日本に行く決心をします。
アメリカのハーパー社が発行する雑誌に
日本のルポルタージュ（現地報告）を書くためでした。

その少し前、ハーンは『古事記』を読んでいます。
『古事記』といえば出雲神話も登場する日本で最も古い歴史書ですが、
それを読んでハーンは日本に関心を持ち、
もし自分が日本に行ったらこんな記事が書きたい……と考えるようになりました。

ハーンが読んだ『古事記』は日本語を英語に訳したものです（ハーンは日本語の読み書きができません）。
訳したのは帝国大学（いまの東京大学）のイギリス人教授B・H・チェンバレンでした。

B・H・チェンバレン 1850-1935年
小泉八雲記念館所蔵

1890（明治23）年4月、カナダのバンクーバーで船に乗ったハーンは、
17日間かけて横浜に到着します。

しかし、ハーパー社との契約に不満を持ったハーンは、着いて早々、
6月には縁切り宣言をしてしまいます。
日本語もわからず仕事もなくなったハーンは、一体どうしたのでしょう。

じつは運よく、島根県尋常中学校と師範学校の
英語教師の仕事を紹介してくれた人がいました。
『古事記』を訳したB・H・チェンバレン帝国大学教授（P14）と、
文部省の高官だった服部一三です。
服部とハーンは1884年、東洋からは日本だけが参加した
ニューオーリンズの万国博覧会の会場で、顔見知りになっていました。

服部一三 1851-1929年 岩手県立図書館所蔵

小泉八雲記念館所蔵

40才で英語教師を初体験

そのとき、松江市にあった島根県尋常中学校と師範学校では、英語の授業ができる外国人教師を求めていました。

2つの学校では、前年の9月からカナダ人の宣教師が英語を教えていました。しかしこの宣教師の授業態度に問題があり、生徒にも評判が悪かったので、島根県は代わりの教師をさがしていました。チェンバレンと服部はその情報をキャッチして、ハーンを推せんしてくれたというわけです。

ハーンは生まれてから40年間、英語の先生など経験したことがありません。それでもやってみようと思ったのは、県知事の次に高いお給料(月に100円)にも魅力に感じたからに違いありません。

横浜市内のお寺で知り合った真鍋晃という青年を通訳兼案内役として、ハーンは1890(明治23)年8月30日、横浜から松江にやって来ます。宿は松江大橋のほとりにあった富田旅館(いまの大橋館あたり)に決めました。それから2カ月半、ここに泊まります。

富田旅館
小泉八雲記念館所蔵

ハーンはなぜ「ヘルンさん」と呼ばれるようになったか

さて、ハーンは島根県尋常中学校の英語教師になるにあたって、籠手田安定島根県知事と条約書（契約書）を取り交わしています。そこにはハーンの名前が「ラフカヂオ・ヘルン」（Lafcadio Hearn）と記されていました。地元の山陰新聞も、ハーンが松江に来たというニュースを伝えるとき「ヘルン氏は…」と書き始めています。

ハーン自身も「ヘルン」と呼ばれることを、別に気にしませんでした。そんな事情でハーンは、松江では「ヘルンさん」「ヘルン先生」と、親しみをもって呼ばれるようになったのです。

小泉八雲旧居も昔は、（いまも時々）ヘルン旧居と呼ばれていました。

島根県知事 籠手田 安定 1840-1899年
「文学アルバム小泉八雲」（光文社）より

条約書

小泉八雲記念館所蔵

条約書には「ラフカヂオ、ヘルン」の文字が

島根県尋常中学校の校舎
小泉八雲記念館所蔵

小泉セツの23年

生まれてすぐ、小泉セツから稲垣セツに

ハーンがアメリカに渡る少し前、日本はサムライの時代が終わろうとしていました。
1868年、徳川家康が江戸（いまの東京）に開いて260年以上も続いた幕府が倒れました。
日本の政治は江戸幕府から新しい政府にバトンタッチされ、
元号が慶応から明治に変わります（明治維新）。
その節目の年、慶応4年の2月4日、
松江の南田町に小泉セツが生まれました。
誕生日が節分のころだったので
「セツ」と名付けられます。

セツと養母の稲垣 トミ 1843-1912年　小泉八雲記念館所蔵

父の小泉弥右衛門湊は、
松江藩に代々続く武家の8代目で、
武士のなかでもトップクラスの番頭（藩の軍団長）。
母のチエは、小泉家よりもっと格の高い
家老職の塩見家から嫁いできたお嬢さま。
セツは父湊、母チエとの間に生まれた
6人兄弟の次女でしたが、
生まれてすぐ、
子どもがなかった遠い親戚の稲垣家の養子になり、
内中原町に移りました。

明治20年代～明治末年の松江城天守　松江歴史館

ワレットとの不思議な出会い

セツが3才のとき、いつまでも忘れることのできない出来事がありました。セツは実の父親・小泉湊が隊長をつとめる松江藩の軍隊の練習を見に行きます。そのとき、軍隊の砲術（鉄砲の技術）を教える30代のフランス人が、まだ幼いセツに近づいてきたのです。

＊

私のいるすぐ前に唐人（異国人）が来た。赤い髪の毛で背が高いので驚いて見上げた。
私に並んでいた信喜代という四ツ上の親類の男の子は、こわがって声を上げて泣いてお祖母さんにしがみ付いた。私は少しもこわいと思わなかった。
ただ目を見張ってあきれて見上げた。
その時に、その唐人が何だか言って、
笑って私の髪の毛を撫でた。
私はやはり唐人の顔を見ていた。

セツの実父 小泉 湊 1836-1887年　小泉八雲記念館所蔵

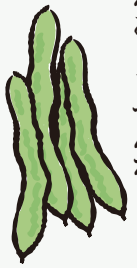
そうすると大きなその人の手が私の手に何だか持たせた。私は非常に嬉しくてそれをもらった。
ただぼんやりあっけに取られて、その人の後ろ姿を見送った。
その唐人は、ワレットであった。私のもらったのは小さい虫眼鏡であった。
（略）私がもしもワレットから小さい虫眼鏡をもらわなかったら、
後年ラフカヂオ・ヘルンと夫婦になることも
あるいはむずかしかったかも知れぬ。
その虫眼鏡は、それ以来今日までなお私の手に保存されている。

セツ自筆「幼少の頃の思い出」　池田記念美術館
（読みやすいように、部分的に編集しました）

小泉八雲記念館所蔵

ワレットという緑色の豆

皆さんはスーパーで、ワレットという緑色の豆が並んでいるのを見たことがありませんか？
セツに虫眼鏡をプレゼントしたワレットが持ち込んだインゲン豆だから、
松江ではモロッコインゲンをワレットと言うんだという説があります。



小学校を途中であきらめ、父親の会社で働く

明治に時代が変わると、
武士は武士という特別な身分を取り上げられ、
禄(給料)をもらえなくなります。新しく士族と呼ばれ、
平民(一般市民)とは違う地位こそ与えられましたが、
自分で新しい仕事をさがさなければ生活できなくなりました。
しかし経験したことのない職業に就いたり、
新しく会社を始めた士族の多くは失敗しました。
そこからたくさんの悲劇が生まれます。
セツが養子にいった稲垣家も小泉家と同じ士族でしたが、
稲垣の父が人にだまされるなどして、どんどん生活が苦しくなります。

新地遊郭松花橋の景　今岡ガクブチ店

当時の小学校は8年制でした。
セツは内中原小学校に入学して下等教科(4年間)までは通いましたが、
上等教科への進学をあきらめなくてはなりませんでした。
そして稲垣家の家計を助けるために、
わずか11才で実の父親・小泉湊が始めた機織会社で働き始めます。
セツは18才のとき(明治19年)、鳥取の士族・前田為二をお婿さんに迎え、結婚します。
しかし財産のない稲垣家の悲しい現実を知った為二は次の年、
家を飛び出します。大阪に行ったきり、
ついに帰って来ませんでした。
結局セツは22才で為二と正式に離婚し、
稲垣家から小泉家に籍を戻しました。

20才ごろのセツ
小泉八雲記念館所蔵

『ヘルンとセツはこんな人』

浴衣を着て葉巻を吸うのヘルン、
色白のセツさん

ヘルンは富田旅館のあと、
大橋川に面したすぐ近くの借家(京店)に引っ越します。
そこに住み込みの世話係としてやって来たのがセツでした。
1891(明治24)年2月ころのこと、
セツは23才になったばかりでした。
2人を知る富田旅館の主・富田太平と妻のツネは、
ヘルンの様子を次のように語り残しています。

(『湖都松江』37号に全文掲載。読みやすいように現代カナに直して手を加えました)

京橋川の風景　松江歴史館

ヘルン

「西洋人としては身長が低く157センチくらい。
髪の毛はうす黒く、鼻の下にひげをたくわえていました。
鼻の高い人が背をかがめて座布団に座り、浴衣を着て葉巻を口にしている様子が、
西洋人のような日本人のような格好で、
なんとも言えない可笑しみを覚えました。
声の調子はあまり高い方ではなく、少し錆び声で、
可笑しいことがあると遠慮なく笑われました。
右目(左目は失明)はきつい近視のはずですが、
ふだんはメガネを使いませんでした。
左のポケットに片メガネが入っていて、必要なときに取り出し、
ちょっと目に当てます。すると、お客の顔や着物などは、サッと見ただけで、
すぐに覚えてしまわれます」

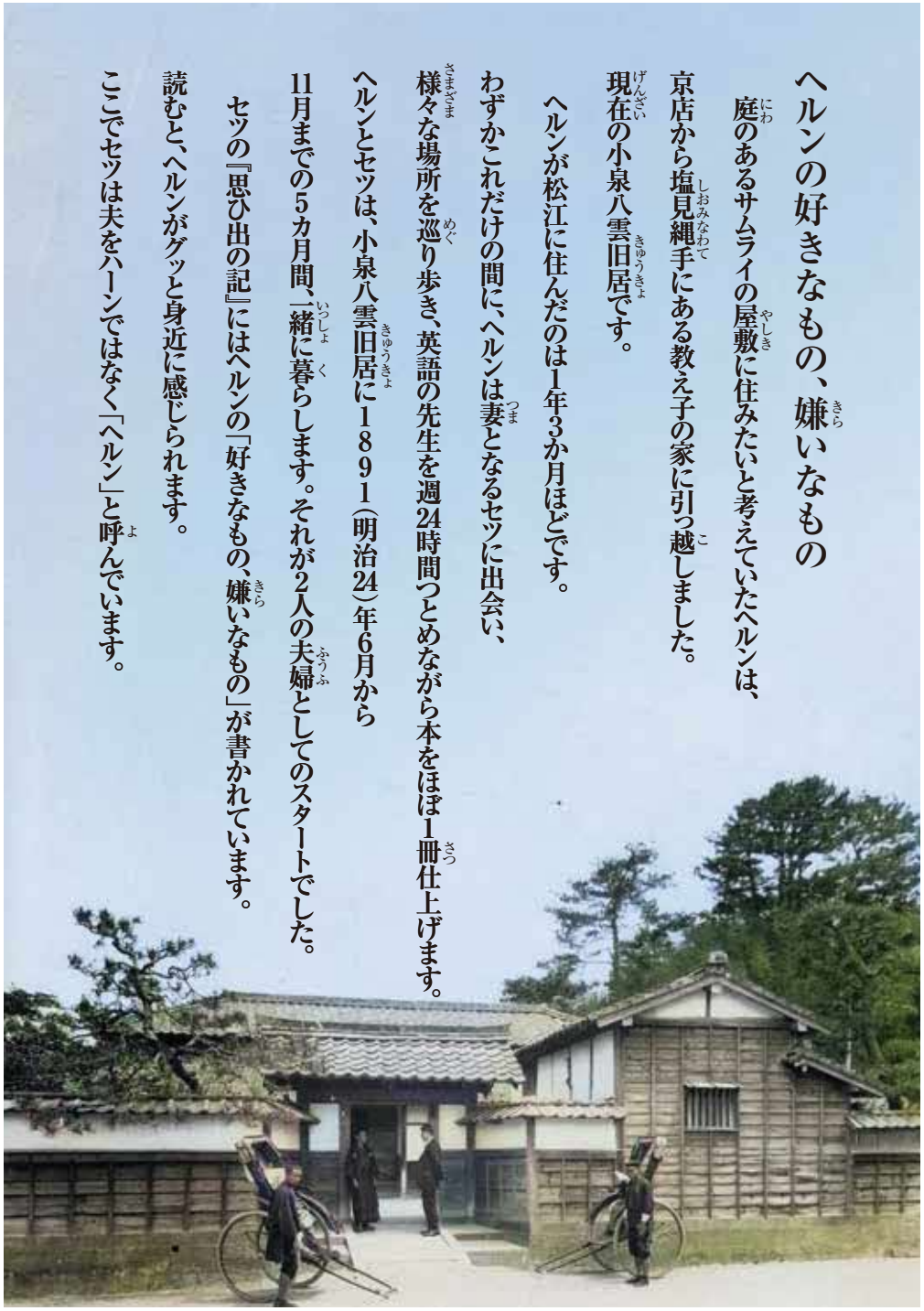
小泉八雲記念館所蔵

ヘルンの好きなもの、嫌いなもの

庭のあるサムライの屋敷に住みたいと考えていたヘルンは、
京店から塩見縄手にある教え子の家に引っ越しました。
現在の小泉八雲旧居です。

ヘルンが松江に住んだのは1年3か月ほどです。
わずかこれだけの間に、ヘルンは妻となるセツに出会い、
様々な場所を巡り歩き、英語の先生を週24時間つとめながら本をほぼ1冊仕上げます。
ヘルンとセツは、小泉八雲旧居に1891(明治24)年6月から
11月までの5カ月間、一緒に暮らします。それが2人の夫婦としてのスタートでした。

セツの『思ひ出の記』にはヘルンの「好きなもの、嫌いなもの」が書かれています。
読むと、ヘルンがグッと身近に感じられます。
ここでセツは夫をハーンではなく「ヘルン」と呼んでいます。



塩見縄手の旧居　小泉家所蔵

思ひ出の記

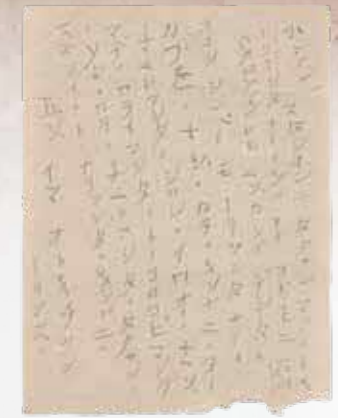
ヘルンの好きな物をくりかえして、ならべて申しますと、
西、夕焼、夏、海、遊泳、芭蕉、杉、淋しい墓地、虫、怪談、浦島、蓬莱などでございました。
場所では、マルティニークと松江、美保の関、日御碕、それから焼津、
食物や嗜好品ではビステキとプラムプーデン、と煙草。
嫌いな物は、うそつき、弱いものいじめ、
フロックコートやワイシャツ、ニュ・ヨーク、そのほかいろいろありました。
まず書斎で浴衣を着て、静かに蝉の声を聞いている事などは、
楽しみの一つでございました。

『思ひ出の記』小泉節子著　ハーベスト出版

小泉八雲記念館所蔵

2人の会話は「ヘルン言葉」で

ヘルンからセツへの手紙

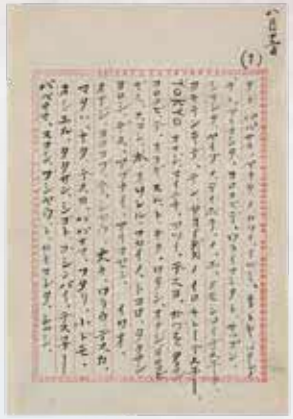


1904（明治24）年8月10日 焼津小泉八雲記念館所蔵

小ママン
スタシオン（駅）ニ タクサン マツノ（待つ） トキ
アリマシタナイ。（ありませんでした。） ソノ ヨナ（ような） コドモニ
ICECREAM（アイスクリーム） ヤル
ムツカシイ（難しい） デシタ。
スコシ シンパイモ アリマシタナイ。（ありませんでした。）

日本に来たばかりで、
まだ日本語がわからないヘルン。英語ができないセツ。
2人はどうやって「会話」していたのでしょう？
それは「ヘルン言葉」という特別な日本語でした。
ヘルンは自分が知っている日本語を、英語式の
順番でしゃべり、手紙ではカタカナで書きます。
たとえば、「ママ・サマ・ニ・ネガウ・ジュブン（じぶん）・ノ・
カラダ・カワガル（かわいがる）」というように。
上の手紙はヘルンが亡くなる1か月前に、
セツに宛（あ）てて書いたものです。注意深（ちゅういぶか）く読むと、
このなかにNHK朝の連続ドラマ小説（しょうせつ）「ばけばけ」の
ヒロインの名前が出てきます。

セツからヘルンへの手紙



1904（明治24）年8月12日　池田記念美術館所蔵

一方（いっぽう）、セツが使うのも「ヘルン言葉（ことば）」です。
「シンセツノパパサマ、イチバンノパパサマ、アナタノ、
カラダ、ダイジョウブ、デスカ」というように。
ヘルンはセツを「ママン」「ママ・サマ」と呼（よ）び、
セツもヘルンを「パパサマ」と呼（よ）んでいます。
グド（グッド）、パパサマ、アナタ、ノ、カワイ（可愛い）、テガミ、
3トキ（度）、ワタシノテニ、アリマシタ、
ヨロコビデ、ワライマシタト（笑いました）、セップン、
シマシタ、ヤイヅノ、テイボラ（堤防）、ノ、エ（絵）、
オモシロイ（面白い）デス子（ね）ー、
ヨキテンキデ、テンノイロキレー（天の色がきれい）デス子（ね）ー。

ヘルンが借家の2階から見た松江大橋

今岡ガクブチ店

『「小泉八雲」の誕生』

熊本で赤ちゃんを授かる

1891(明治24)年11月、ハーンはセツと一緒に九州の熊本に向かいます。
熊本の第五高等中学校(現在の熊本大学)への転任が決まったからです。
ハーン一行は松江から宍道まで船で移動し、
人力車で中国山地をこえます。
その日の朝、松江大橋の桟橋には200人もの人たちが集まり、
「万歳、万歳!」の斉唱で船を見送りました。
松江を離れることにした理由を、ハーンはこう書いています。

◆松江は冬が厳しいこと
◆雪のめったに降らない南九州の大きな官立(国立)学校からの招きがあったこと
◆ずっと体調がよくなかったので、暖かい気候への憧れがあったこと

嘉納治五郎 1860-1938年
出典:国立国会図書館「近代日本人の肖像」(https://www.ndl.go.jp/portrait/)

熊本第五高等中学校の校長は、当時、30才の嘉納治五郎でした。
嘉納はのちに講道館柔道をスポーツとして全国に広めた人で、
オリンピックで柔道が正式競技になると、
JUDOは日本の「お家芸」となりました。

＊

ハーンとセツは熊本で3年暮らしますが、
この間に長男が誕生しました。
1893(明治26)年11月、
ハーン43才、セツ25才のときです。
ハーンは息子に、自分の名前「ラフカディオ」から
「カディオ」をとって「かずお」と名づけ、
長男なので「一雄」の漢字をあてました。

一雄の七五三の祝いに親子3人で記念撮影

小泉家所蔵

「小泉八雲」という名前はどこから来たの？

1894（明治27）年、ハーンは熊本第五高等中学校をやめ、神戸の英字新聞に転職します。

熊本時代に長男を授かったように、神戸での2年間もハーンとセツにとって、大きな喜びがありました。

ハーンはギリシャで生まれてからずっとイギリス国籍でしたが、日本人になるための手続き（帰化手続き）を進め、1896（明治29）年2月、ついに日本国籍を取得できたのです。

ハーンは小泉セツの戸籍に入り同時に、

ラフカディオ・ハーンは「小泉八雲」と名前が変わりました。

なぜ「八雲」という名前になったのでしょう。

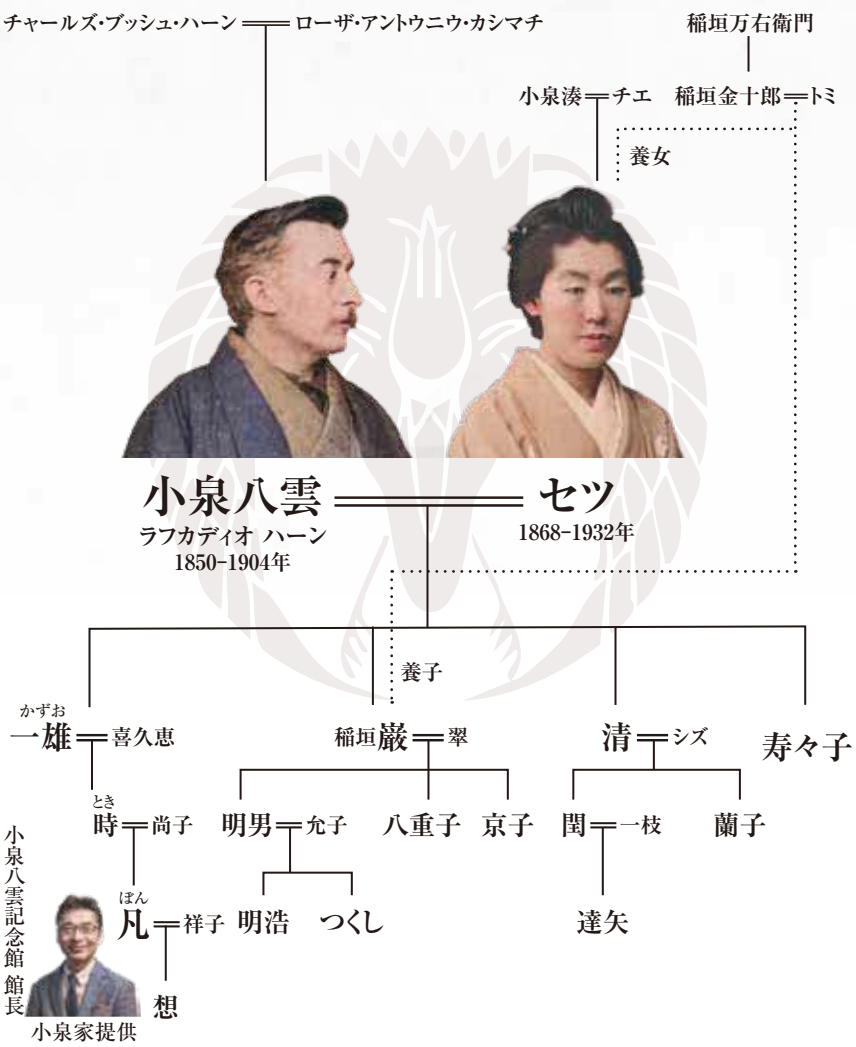
それは、八岐大蛇伝説で知られるスサノオノミコトが、

クシナダヒメとの結婚を祝って詠んだ、日本で一番古い和歌から名づけられました。

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣つくる　その八重垣を

八重垣神社　鏡の池

小泉家 略系図



セツが語り、八雲が作品にする

小泉八雲になったハーンは、生涯に30冊ほどの著作を残しました。
うち16冊は日本で書かれたものです。
（日本語で書かれた作品はひとつもありません）

八雲の代表作といえば、
有名な「耳なし芳一」や「雪女」が載っている『怪談』でしょう。
けれど、「耳なし芳一」も「雪女」も、
八雲が自分で想像してつくりだしたお話ではありません。
日本のどこかで古くから伝わる怖い話でした。

なぜ日本語のわからない八雲が、日本の怪談を知ることができたのでしょう。
それはセツの協力があったからです。
八雲はセツに「語り部」の素質があることを見抜き、

大橋川から嵩山をのぞむ　今岡ガクブチ店

日本に古くから語り継がれる話を、セツに語らせます。八雲はそれを音（耳）で聞き、
頭の中で整理・味付けをし、人の心をもっとワクワクさせる文学作品にまで磨き上げたのです。
こうした手法を「再話」と言います。
八雲の再話文学がなければ、「耳なし芳一」も「雪女」も、いまごろ消えてなくなっていたかもしれません。

セツの『思ひ出の記』を読むと、八雲とセツの共同作業の様子をうかがい知ることができます。

思ひ出の記

私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと『本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければ、いけません』と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。

『思ひ出の記』小泉節子著　ハーベスト出版

小泉八雲記念館所蔵

『小泉八雲の怪談』

日本で最初の本は、松江の暮しのなかから生まれた！

小泉八雲が日本で書いた（もちろん英語で）最初の本は、
八雲が松江や出雲で見たり感じたりしたことを、詳しく紹介した本です。
当時の日本はアジアの東の端の、訪れた人がまだそう多くない
未知の国でしたから、欧米で評判になりました。
この本はのちに日本語に訳されたとき、『知られぬ日本の面影』というタイトルが付けられます。
『知られぬ日本の面影』はそのほとんどが、松江での生活に根付いた作品です。
そのせいか八雲は、「神々の国の首都」という章で松江に伝わる怪談をいくつか取り上げています。
次に紹介する「小豆とぎ橋」は北田町の普門院を、
「飴を買う女」は中原町の大雄寺を舞台にしたものです。それに続く42ページからは、
傑作「雪女」を全文載せました。やさしい日本語訳になっていますので、ぜひ一度読んでみてください。

明治20年代から明治末年の興雲閣　松江歴史館

松江城下町今昔

小泉八雲記念館所蔵

松江城下町今昔

新宿博物館所蔵（P40・42・43・44・46・48）

小豆とぎ橋

松江の北東部にある、普門院の近くに、「小豆とぎ橋」と呼ばれる橋がありました。むかし、夜な夜な、その橋のたもとで女の幽霊が小豆を洗っていたのだそうです。

日本には、「杜若」という紫色の美しい花がありますが、それにちなんだ「杜若の歌」という謡があります。しかし、小豆とぎ橋の近くではその謡を決して歌ってはならないといわれていました。理由はわかりませんが、その橋の近くに現れる幽霊が、その謡を聞くと怒りだし、歌った本人に恐ろしい災難が降りかかるというのです。

ある時、怖いもの知らずの豪胆な侍がその橋を通りかかり、「杜若の歌」を大声で歌いました。ところが、幽霊など現れなかったので笑って家に帰りました。

すると、自分の家の門の前で、見たこともない背のすらりとした美しい女に出会いました。女はお辞儀をすると、漆塗りの文箱を差し出しましたので、侍も、礼儀正しくお辞儀を返すと、「私はただの使いですが、奥様よりこの品をあなた様に」といって姿を消しました。

侍がその箱を開けてみると、中には血だらけの幼い子どもの生首が入っていました。家に入ってみると、頭をもぎ取られた我が子の死体が横たわっていました。

『小泉八雲の怪談づくし』小泉凡監修・解説　八雲会

飴を買う女

中原町と呼ばれる通りにある大雄寺には、こんな話が伝えられています。

中原町に、水飴を売っている小さな飴屋がありました。水飴は、麦芽から作った液体で、お乳にめぐまれない赤ん坊に与えたものでした。

この飴屋に、毎晩夜が更けてから、顔色の青ざめた女が白い着物を着て水飴を一厘買いに来ます。飴屋は、女があんまり痩せて顔色が悪いものだから、ある晩、その女の後をつけてみると、女が墓へ入っていったので怖くなって逃げ帰ってきました。

次の夜、女はまたやってきて、飴屋に自分と一緒に来るようにと、手招きをします。そこで飴屋は、友達を連れて女の後について墓場へ行ってみました。女はとある石塔のところに来ると、ぱっと姿を消しました。すると、地面の下から赤ん坊の泣き声が聞こえてきます。

墓石を掘り起こしてみると、墓の中には毎晩水飴を買いに来た女の骸があり、そのそばに生きている赤ん坊がいました。そして、赤ん坊のそばには、水飴を入れた小さな茶碗が置いてありました。この母親は、死んですぐに埋葬されたために、墓の中で赤ん坊が生まれ、母の幽霊が水飴で子どもを育てていたのでしょう。

愛は、死よりも強いのです。

小泉八雲記念館所蔵（P41・45・47・48下）

『小泉八雲の怪談づくし』小泉凡監修・解説　八雲会

雪女

小泉八雲記念館所蔵

『怪談(KWAIDAN)』初版本

むかし、武蔵国(＊1)のある村に、茂作と巳之吉というきこりが住んでいました。これから語るのは、茂作が、もう年寄りで、巳之吉が、まだ十八のきこりの見習いだったときのお話です。

ふたりは、毎日、村から、二里(＊2)ほどはなれた森へ木をたおしにでかけていました。そのとちゅうに、大きな川があって、ふたりは、いつも渡し船にのって、川をわたっていました。これまで、その川には、何度も橋がかけられたのですが、洪水があるたびに、流されていました。水かさが増すと、ふつうの橋ではたえられないほど、流れのはやい川だったのです。

寒さのきびしいある冬の夕方、茂作と巳之吉が家へ帰っていると、猛吹雪に見まわれました。大きな川の船着場についてみると、渡し守は、川の反対岸に船をつけたきり、家に帰ってしまっていました。この寒さでは、とてもおよいでわたるわけにはいきません。見ると、川辺に、渡し守の番小屋を見つけました。ふたりは、これ幸いと、なかにはいって、吹雪をしのぐことにしました。

番小屋は、二畳ばかりのひろさで、火をおこすところもなければ火鉢さえなく、戸口がひとつあるだけで、まどもついていませんでした。茂作と巳之吉は、戸を閉めて、蓑をかぶってよこになりました。

さいしょのうちは、さほど寒さを感じず、吹雪もじきにやむだろうと、ふたりはおもっていました。

茂作は、すぐにねむってしまいましたが、巳之吉は、なかなかねつけず、もうれつな風の音や、戸に打ちつける雪の音に耳をすましていました。外の川は、ごうごうと音を立てて流れ、番小屋は、海の大波にもまれる小舟のように、ぎしぎしと音を立てていました。ひどい吹雪でした。あたりは、刻一刻と冷えていき、巳之吉は、蓑にくるまって、ぶるぶるとふるえていましたが、やがてねむってしまいました。

しばらくして、巳之吉は、顔にあたる雪で目をさましました。見ると、番小屋の戸が開いています。そして、雪あかりのなか、全身真っ白な女が、茂作の上にかがみこんで、白いけむりのような光る息をふきかけていました。ところが、見られていたことに気づいた白い女は、こんどは、巳之吉のほうへかがみこんできました。巳之吉は、さけぼうとしましたが声がでず、うごくことさえできません。白い女は、とうとう顔と顔がふれそうになるほど、ちかづいてきました。巳之吉は、その女の目を見て、ぞっとしました。ですが、どうじに、とてもうつくしい、とおもいました。

白い女は、しばらく巳之吉を見つめたあと、にこりとほほえみ、ささやくようにいいました。

「おまえも、この老人のようにしてやろうとおもったが、まだ、若いから、ちょっと、かわいそうだ。おまえは、きれいな顔をしているね。よし、いま、手をだすのは、やめておこう。だが、もし、今夜、見たことをだれかにしゃべったら、それがたとえ、おまえの母親であろうと、わたしは、おまえを殺す。いいかい？　決してわすれるでないよ……」

そうして、白い女は、巳之吉からはなれ、戸口から外へでていきました。

すると、巳之吉は、また、体がうごかせるようになり、ぱっと、とびおきると、戸口まで走っていって、外を見てみました。ですが、白い女の姿は、どこにもなく、ただ、はげしい雪が、番小屋のなかにふきこんでくるだけでした。

巳之吉は、戸を閉め、小屋にあった木をつかって、戸が開かないようにしました。そして、しばらくすると、自分は、夢でも見ていたのではないか、とおもいはじめました。いまのは、ただ、風で戸が開き、なかに雪がふきこんで、そのゆらめく雪あかりを、白い女だと見まちがえたのではなかろうか。

巳之吉は、茂作に声をかけてみました。ところが、返事がありません。どきっとした巳之吉は、くらやみのなか、あわてて手さぐりで茂作を見つけだし、顔をさわってみました。すると、その顔は、氷のようにつめたくなっていました。茂作は、死んでいたのです。

吹雪は、明け方にやみました。朝になり、番小屋に渡し守がもどってくると、凍って死んでいる茂作と、そのそばで気を失ってたおれている巳之吉を見つけました。巳之吉は、すぐに手当をうけ、しばらくして、目をさまし

小泉八雲の怪談

ましたが、あのおそろしい出来事のせいで、長いあいだ寝たきりになってしまいました。巳之吉は、茂作が亡くなったことに心をいためていましたが、白い女の幻については、だれにもしゃべりませんでした。

その後、元気になった巳之吉は、また、きこりの仕事にもどりました。毎朝、ひとりで森へでかけ、薪を背負って帰り、その薪を売るのを母親に手伝ってもらうようになりました。

つぎの年の冬、日の暮れかけた帰り道、巳之吉は、偶然、おなじ道をあるいていた旅途中の娘をおいぬきました。背が高く、ほっそりとした、とてもうつくしい娘で、巳之吉があいさつすると、娘は、小鳥のさえずりのような心地いい声で返事をしてくれました。巳之吉は、娘とならんであるき、はなしはじめました。

娘の名は、お雪といいました。お雪は、最近、両親を亡くしたため、江戸へむかっているところでした。江戸に、貧しいながらも親戚がいるので、どこか奉公先でも見つけてもらおうとしていたのです。

巳之吉は、見れば見るほど、うつくしい、このふしぎな娘に、ひとめでほれてしまいました。そこで、巳之吉は、お雪に「だれか許嫁がいるのか」と、たずねてみました。すると、お雪は「めっそうもない。そんな方はおりません」と、わらってこたえました。すると、こんどは、お雪が「巳之吉さまには、もうお嫁さんがいらっしゃるのですか？　それとも、結婚を約束されている方が、いらっしゃるのですか？」と、きいてきました。巳之吉は「いまは、母

をひとりで養っており、その上、自分はまだ若いので、嫁をもらうことは、かんがえていない」と、こたえました。

おたがい、そのことを確認しあうと、あとは無言であるきつづけ、時折、視線を交わすだけでした。ただ、ことわざに「目は口ほどに物を言う」と、あるとおり、巳之吉の住む村につくころには、ふたりの心のきょりは、すっかり縮まっていました。そこで、巳之吉は、お雪に「しばらく、うちでやすんでいかないか」と、きりだしました。すると、お雪は、すこしためらい、はにかみながらも「よろしいのであれば」と、こたえました。

巳之吉の母は、よろこんでお雪をむかえいれ、あたたかい食事をだしてくれました。そして、お雪のふるまいがとても上品だったので、母も、すぐにお雪を気にいり、江戸へ発つのをのばしたらどうかと、しきりにすすめました。

そうして、当然のなりゆきながら、お雪が江戸へいくことはなくなりました。お雪は、巳之吉の家にのこり、近所で評判のお嫁さんになったのです。

それから五年ほどして、巳之吉の母は、お雪のことをさいごまでかわいがりながら、息を引きとりました。

そして、お雪は、十人の子どもを産みました。それが、みな美男美女で、色白の子ばかりでした。

近所の人たちは、お雪のことを「自分たちとはちがう、器量よしのふしぎな女だ」と、うわさしました。なぜなら、ほとんどの百姓の嫁は、はやくに年をとっていくものですが、お雪は、子どもを十人産んでも、まだ、村にきた

ばかりのころのように、若々しく、うつくしかったからです。

ある夜、子どもたちが寝静まったころ、お雪は、行灯のあかりでぬいものをしていました。巳之吉は、そんなお雪を見つめながらいいました。

「おまえが、そこでそうしているのを見ると、おれが十八のときに見た、ふしぎなできごとをおもいだすよ。あのとき、おれは、おまえのように白くてうつくしい女の人を見た。うん、いまのおまえにそっくりだ……」

お雪は、ぬいものに目をおとしたまま、こたえました。

「あら、では、その女の人のことを、おしえてくださいな。どこでお会いになったのです？」

そこで、巳之吉は、渡し守の番小屋でおきた、あのおそろしい夜の出来事をはなしはじめました。白い女にかがみこまれ、ほほえみながら、ささやかれたこと、茂作が凍って死んでしまったことなどを語り、最後に、こうつけくわえました。

「夢にも現にも、ほかにおまえのようにうつくしい女を見たのは、あのときだけだ。だが、もちろん、あれは、人間ではなかったのだ。おれは、こわかった。とてもこわかった。でも、あの女は、白くうつくしかった……あれは、夢だっ

たのか、それとも、雪女でも見てしまったのか、いまとなっては、もうわからない……」

すると、お雪は、とつぜん、ぬいものをなげすて、がばっと立ち上がり、すわっていた巳之吉に、ぐいっと顔をちかづけると、大声でさけびました。

「それは、わたし、わたし、わたしだ！　このお雪が、雪女だったんだよ！　わたしは、いったはずだ。あのときのことをひとことでもしゃべったら、おまえを殺すと！　だけど……あそこでねむっている子どもたちの寝顔を見れば、どうしてそれができよう。いいかい？　子どもたちを、くれぐれも、よく世話しておくれ。よもや、あの子たちを不幸にするようなことがあれば、そのときこそ、おまえの命はないよ……」

お雪の声は、しだいに、か細い風のようになっていきました。そして、お雪は、白い霧となって渦をまき、天井の梁へとのぼっていくと、煙だしからふるえるようにでていきました。

それから後、お雪の姿を見ることは、二度とありませんでした。

＊1 現在の東京都や埼玉県、神奈川県川崎市や横浜市の大部分を含む地域
＊2 尺貫法の単位で、一里は、約四km

『怪談 こわくて不思議な10の話』
作 小泉八雲
選・訳 小宮由/アノニマ・スタジオ刊
2025年6月に刊行の新訳版より転載

『松江で始まり、東京で終わる』

東大の学生に慕われた英語講師

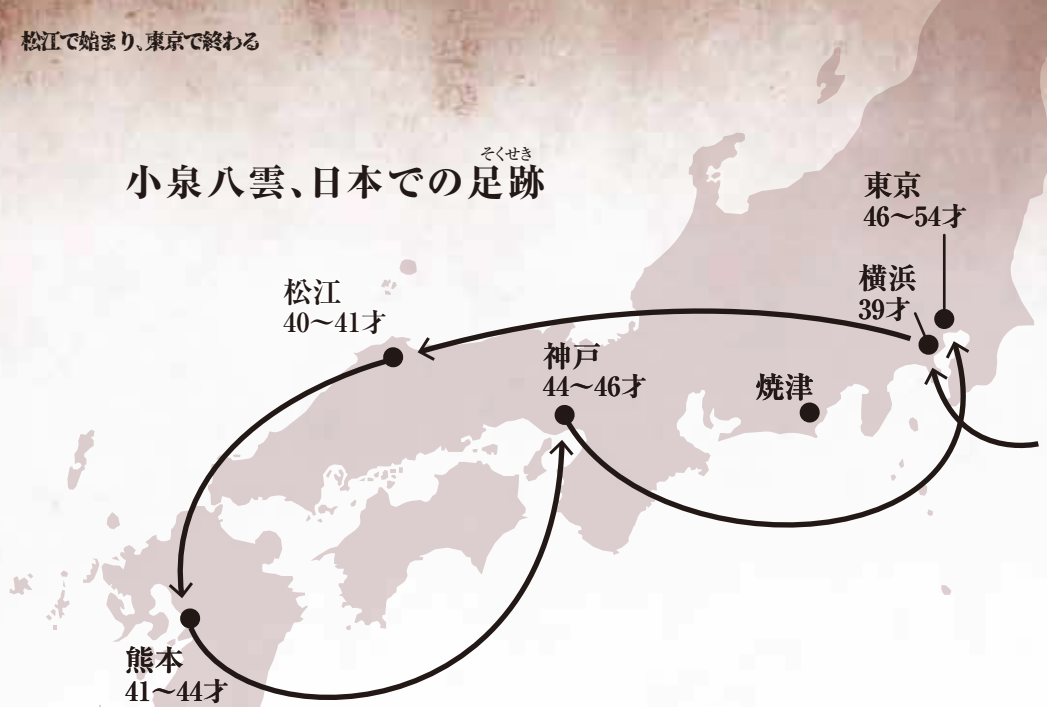
1896(明治29)年に日本に帰化して間もなく、八雲は帝国大学文科大学(現在の東京大学文学部)から教師として招かれます。神戸にいた八雲は2か月ほど松江に旅行してから、家族とともに上京します。

そこからの約8年間、八雲は東京で暮らします。うち約7年を帝国大学で、あとの半年を早稲田大学で教えました。帝国大学の最後は、大学側から一方的に辞めさせられたため、ハーンを慕う学生が大学に抗議したというエピソードが残っています。

八雲の後任はイギリス留学から帰った、八雲より17才年下の夏目金之助(当時36才)でした。金之助はのちに、ペンネームで次々と小説を発表、流行作家となりました。『吾輩は猫である』『坊つちやん』で有名な、あの夏目漱石です。

夏目漱石 1867-1916年
出典:国立国会図書館「近代日本人の肖像」(https://www.ndl.go.jp/portrait/)

小泉八雲、日本での足跡



39才で横浜の港に降り立ち、松江→熊本→神戸→東京と続いた八雲の日本の旅は、1904(明治37)年9月で終わりを迎えます。54才でした。

西大久保の家　小泉家所蔵

ともに暮らして14年、八雲を失って27年

夫の八雲が亡くなったとき、セツは36才でした。
正式な結婚が認められてからわずか8年。
しかしこの間、夫婦は長男の一雄に続き次男巌、三男清、
長女寿々子の4人の子宝に恵まれます。
東京に越して6年後の1902(明治35)年には、
大久保村(現在の新宿区大久保1丁目)に
広い家を購入することができました。
慶応4年生まれのセツは大正を経て昭和まで生き
1932(昭和7)年にこの大久保の家で64才の生涯を終えます。
23才の若さで松江を離れましたから、
すっかり東京のヒトになっていたことでしょう。

セツと家族のアルバム　前列左から寿々子、セツ、喜久枝(一雄の妻) 後列左2人目から清、巌、一雄
小泉家所蔵

八雲とセツを支えた人々

岸　清一
1867-1933年

西田 千太郎
1862-1897年

松江が生んだ日本の近代スポーツの父。かつて東京の渋谷に氏の名前を冠した岸記念体育館がありました。弁護士として、アメリカにおける八雲の著作権を守ることに協力。八雲の遺品を活用するため、小泉八雲記念館建設の募金を行いました。

松江雑賀町の出身で、八雲が島根県尋常中学校に赴任したときの教頭。公私にわたって八雲を支えました。八雲が松江を離れたあとも文通が続きましたが、結核のため34才の若さでなくなりました。

袖師が浦より千鳥城を望む　松江歴史館

❶ 松江に残る八雲の「面影」

小泉八雲記念館

八雲は生前、日本では人気作家というわけではありませんでした。
作品はすべてぜんぶ英語で書かれていたので、
日本人が直接読めなかったからです。けれど、亡くなって20年以上たった
大正から昭和の時代にかけて日本語に訳された本が
次々出版されると、少しずつ八雲を知る人が増えていきます。
すると八雲の価値を、後世にのこしておきたいというムードが高まります。
その結果、八雲の教え子やゆかりの人々の協力で、
1934(昭和9)年に小泉八雲記念館がオープンしました。
八雲が書いた初版本、愛用していた机とイスをはじめ、
八雲が日本に来るときに持ってきた
トランクやボストンバッグなどが展示されています。
館長は八雲のひ孫の小泉凡さんです2025年現在。

❷

田和山から見た松江市風景　松江歴史館

小泉八雲旧居(ヘルン旧居)

八雲が1891(明治24)年6月から11月までの5カ月間、セツ夫人と暮らした武家屋敷。八雲が好んで眺めた庭などが当時のまま保存されています。

❸

ゴーストツアー

❹

❺

小泉凡さんがアイルランドで経験したツアーからの発想で、2008年からスタート。八雲ゆかりの怪談スポットを、松江の語り部が案内する人気ツアーです。

新宿歴史博物館所蔵(❶❷❹❻)　小泉八雲記念館所蔵(❸❺)

アイリッシュフェスティバル ニューオーリンズフェスティバル

八雲は若いころ、アメリカのニューオーリンズに住みました。それが縁で松江市とニューオーリンズ市は、1994年に友好都市になりました。また、ハーンのルーツであり子ども時代を過ごしたアイルランドとも交流を続けています。松江市内で春にアイリッシュフェスティバル、秋にニューオーリンズフェスティバルが開かれるのは、ハーンとの縁が始まりなのです。

❻

❶ 八雲とセツの略年譜

ラフカディオハーン　小泉セツ

1850（嘉永3）年	6月27日	ラフカディオ・ハーン、ギリシャのレフカダ島に生まれる
1852（嘉永5）年		母とともに、父の実家のあるダブリンへ移る。その後、大叔母ブレナンに引き取られる
1854（安政元）年		母はハーンを残してギリシャに帰る
1857（安政4）年		両親が離婚し、父は再婚相手とインドへ
1863（文久3）年		イギリスの学校に入学
1866（慶応2）年		遊んでいるときの事故で左目を失明する
1867（慶応3）年		大叔母ブレナンが破産、学校を中退する
1868（慶応4／明治元）年	小泉セツ	小泉セツ、南田町に生まれる。間もなく稲垣家へ養女に
1869（明治2）年		移民船でアメリカに渡る
1876（明治9）年	小泉セツ	内中原小学校に入学
1879（明治12）年	小泉セツ	内中原小学校上等教科に進めず、11才で働き始める
1886（明治19）年	小泉セツ	鳥取の士族・前田為二と結婚
1890（明治23）年	小泉セツ	前田為二と離婚
	4月	ニューヨークから横浜に着く

❷

小泉八雲・セツ

1891（明治24）年	8月	島根県尋常中学校、師範学校の英語教師となり、松江での生活が始まる
	6月	ハーンとセツ、塩見縄手で一緒に暮らし始める
	11月	熊本第五高等中学校への転勤で、セツの家族と熊本へ
1893（明治26）年	11月	長男・一雄が生まれる
1894（明治27）年	9月	日本で初めての著書『知られぬ日本の面影』を出版
1896（明治29）年	10月	神戸の英字新聞社に転職
	2月	日本国籍をとり、ハーンから「小泉八雲」に
1902（明治35）年	9月	帝国大学文科大学講師となり、家族とともに東京へ
	3月	新宿西大久保に新居を構える
1903（明治36）年	3月	帝国大学講師を退職する
1904（明治37）年	3月	早稲田大学文学部講師となる
	4月	『怪談』出版
	9月26日	八雲、心臓発作を起こし、息を引き取る（54才）
1932（昭和7）年	2月28日	セツ死去（64才）

❸

新宿歴史博物館所蔵（❶）　小泉八雲記念館所蔵（❷❸）

小泉八雲記念館所蔵

本書に収録(しゅうろく)した作品は以下を底本(ていほん)としました

『小泉八雲の怪談づくし』小泉凡監修・解説　八雲会

『怪談 こわくて不思議な10の話』作 小泉八雲　訳 小宮由 アノニマ・スタジオ

『思ひ出の記』小泉節子著　ハーベスト出版

『湖都松江』37号　松江市文化協会

主な参考文献(さんこうぶんけん)

『小泉八雲と妖怪』小泉凡著　玉川大学出版部

『怪談四代記　八雲のいたずら』小泉凡著　講談社

『新編　日本の面影』ラフカディオ・ハーン／池田雅之訳　角川ソフィア文庫

『小泉セツ ラフカディオ・ハーンの妻として生きて』小泉八雲記念館

『神々の国の首都に住まう443日』小泉八雲記念館

『小泉八雲、開かれた精神の航跡。』小泉八雲記念館 図録

『別冊太陽　小泉八雲　日本の霊性を求めて』平凡社

『小泉八雲　放浪するゴースト』新宿歴史博物館

『小泉八雲集』上田和夫訳　新潮文庫

『へるん先生の汽車旅行』芦原伸著　集英社文庫

写真・資料等の所蔵先は、それぞれの下部に表記いたしました。